



『山岳新校、ひらきました——山中でこれからを  
生きる『知』を養う』  
刊行記念 シンポジウム  
「山間から〈未来〉を考える」

【シンポジウム報告集】

はじめに

2023年7月9日、高知市立自由民権記念館民権ホールにて、会場・オンライン約110名の参加者とともに、私たちは『山岳新校、ひらきました——山中でこれからを生きる『知』を養う』（以下、「本書」）刊行記念シンポジウム「山間から〈未来〉を考える」を開催した。本稿は、このシンポジウムの報告集である。ここでは、登壇者による論考に先んじて、本書刊行の経緯、ならびにシンポジウム開催の経緯を記しておきたい。

刊行の経緯

2020年9月、奈良県立大学地域創造研究センターに「撤退学研究ユニット」が設置され、学内外の研究者・実践家との共同研究プロジェクト「撤退学」がスタートした。「撤退学」とは、超少子高齢化・地方消滅・東京一極集中・未曾有の財政赤字・環境激変等、現代日本が抱える諸課題を「巨大な生活習慣病」ととらえ、「悪しき習慣」「惰性」「慣性」からの「撤退可能性」を、マクロ（社会全体）とミクロ（個人）の両面から探究する試みである。2022年度～23年度は、「奈良県の発展に資する研究プロジェクト助成」の助成金を得て、「農山村を衰退させる構造力学の解明とその転換可能性に関する実践研究——『学ぶことを学ぶ場』の創設を通じて」を実施している。本書のタイトルにあ

る「山岳新校」とは、ここでいう「学ぶことを学ぶ場」にほかならない。

「山岳新校」での学びは、特にミクロ面に焦点を据え、「スタンダードな生き方」からの個人の撤退可能性を模索するものである。そして、2022年度の活動成果を取りまとめたのが、2023年5月に刊行された本書である。本書の刊行記念シンポジウムが、どのような縁を得て、高知市の自由民権記念館で開催されることとなったのか、その経緯については、以下、青木真兵「シンポジウム開催について」、および中村茂生「口上」を参照していただきたい。

なお、各登壇者による論稿は、シンポジウムにおける対談等の直接的な記録ではない。会場での対談やディスカッション、2夜にわたる懇親会でめぐるめく雑談等をふまえ、各自が改めて展望した「山間から考える〈未来〉」である。是非、味読していただきたい。末筆ながら、自由民権記念館でのシンポジウム開催にご尽力いただいた、高知の方々に感謝申し上げます。本当に有難うございました。

(堀田新五郎 撤退学研究ユニット代表 奈良県立大学)

### シンポジウム開催について

今回の高知でのシンポジウムのきっかけは主に二つ。僕が高知を気に入ってしまったということと、中村さんに作野先生のお話をぜひ聞いていただきたいと思ったことが関係しています。

2023年5月、初めて高知を訪れました。友人の白岩英樹さんの本が出版されたとのことで、出版された際には高知に伺うという約束を履行したのでした。その際、高知蔦屋書店で行なわれたイベントのアテンドを中村さんにしていただきました。高知市内を白岩さんに案内していただいた時に感じた自由な感じというか、どこかアジアの風吹くカオスな雰囲気ですっかり魅了されてしまい、滞在最終日にはぜひまた来たいという思いを胸に中村さんと朝食を食べていました。

その時、どうしても地方活性化という文脈で活動していると、明らかにどんどん人口が減少していくという現実を前にして、撤退とか縮小という言葉が発することができないというお話を中村さんから伺いました。そのお話を

## シンポジウム報告

伺った時、僕が昨年から関わっている撤退学プロジェクト、なかでも縮充について地域に入りながら何度も粘り強く訴えている作野先生の顔が浮かんだのでした。ぜひ中村さんに作野先生をご紹介したい。それが今回のシンポジウム開催に至る直接の理由だったように思います。そして島根、奈良、高知、三つの山がちで過疎が進む県が、そこに住むメンバーを通じてつながったら面白そうだな。ふと、そんなことを思ったのでした。

高知を発った翌週、ちょうど撤退学プロジェクトのミーティングがありました。ミーティングの本題は全て終わったころ、「こんなアイデアは突拍子もないかな」と少しドキドキしながら本件を作野先生に投げかけたのでした。すると、ちょうど高知で講演をする予定があり、その下見に行こうと思っていたとのこと。つまりそれでだいたいの日取りが決まりました。するとすると、堀田先生が「僕も高知は好きでねえ」とのこと。それじゃあ、せっかくならみんなを巻き込んで(もちろん自分も巻き込まれて)いけば、社会を変えるムーブメントのきっかけになるのではないか。本を出版したタイミングだったし、こりゃちょうどいい。うまく開催できれば開催すればいいし、難しければご縁がなかったということ。それを撤退学チーム、白岩さん、中村さんの高知チームに話したら、みなさんのご尽力により、あれよあれよという間にシンポジウムが開催できたのでした。アイデアを投げかけてから開催まで二ヶ月ほどしかなかったのではないのでしょうか。

シンポジウム開催の準備、当日の会場準備、運営などに尽力くださったみなさま、本当にありがとうございました。とにかく楽しかったです。ぜひ次回もいい風が吹いた時、みんなで集まれたらうれしいです。

(青木真兵 思想家・人文系私設図書館ルチャ・リプロキュレーター)

## 口上

日頃からわたしたちのNPO法人の活動を応援してくださっている高知県立大学の白岩英樹先生が新著を出版されるというので、トークイベントを企画しました。感染症蔓延状況もようやくおさまりそうな、でもまだマスクの方が断然多い2023年3月頃のことです。

白岩先生と私の対談形式という、オーソドックスな出版記念イベントを考えていたのですが、その日程に合わせて、奈良から青木真兵さんが訪ねて来られると聞き、それならば相手は青木さんがよかろうと思って白岩先生を通してお願いしました。

私には、そのちょうど一年前にルリャ・リプロでお目にかかるという、青木さんとのご縁がありました。私は青木さんの家のすぐ側に、「天誅組終焉の地」の石碑があることを、その日にはじめて知りました。天誅組の生き残りで、官僚として明治を生きたひとりの人物について私は長い間調べており、その石碑は、写真を通してとても馴染みのあるものでしたから、実物を前に不思議な感慨を覚えました。

出版記念イベントは、5月6日に高知 蔦屋書店で開催され、配信含め100名近い参加者がありました。NPOのこの手の企画では、破格の大入りです。もちろん大いに盛り上がりましたし、イベント後も青木さんはいろんな方とのやりとりに忙しくされていました。

翌日、奈良にお戻りになる前、青木さんは、NPOの事務所を訪ねてくださいました。1時間ほどお話ししたと思いますが、実は青木さんとじっくり会話できたのは、この時が最初です。私は、ある集落の話をしました。50年前にはゆうに100人を超えていた住民が、今3人しかいないのはなぜか、私の考えを述べたのでした。

その1時間の間に、それまで影も形もなかった今回のシンポジウムの種がまかれたと私は思っています。おそらくそこで青木さんは、高知と「撤退学」の間の結びつきに思い当たり、登壇者の顔ぶれまで含めた開催イメージが浮かんだのでしょう。東吉野に戻った青木さんがどのように行動されたのか、詳細は分かりませんが、あれよあれよという間に7月に高知でシンポジウムが開かれることになり、白岩先生と私は段取りに奔走しました。一度だけ、展開がずいぶん早いようですが、大丈夫でしょうか、というような会話を白岩先生と交わした記憶があります。

以上がシンポジウム「山間から“未来”を考える」開催の経緯です。振り返ると、改めて播種から収穫までの期間の短さに驚きますが、青木真兵さんの

## シンポジウム報告

直観と推進力によって実現したシンポジウム、というのが私の理解です。

「撤退学」と「撤退学」のみなさんを知ることができたのは、NPOや私個人にとって、大きな財産だと感じています。山や海を隔てた高知の土壌で、奈良で生まれた「撤退学」はどう根付くでしょうか。

青木さんと高知の縁はその後にも深まる一方です。これを私はひそかに、人文系吉村寅太郎の帰郷と呼んでいます。

(中村茂生 NPO法人地域文化計画 理事)